

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720158

研究課題名（和文） 心的過程に着目した属性叙述構文の体系的記述に関する研究

研究課題名（英文） Research of Property-Predicating Constructions Based on Cognitive Processes

研究代表者

澤田 浩子（SAWADA HIROKO）

筑波大学・人文社会系・講師

研究者番号：70379022

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代日本語の属性叙述に関する構文において、属性を形成する心的過程に着目して記述を行い、複数の構文間の差異を体系的に明らかにすることを目的としたものである。特に、名詞述語文、動詞述語文、および二重主語文について、各構文間の体系性を記述し、そこに必要となる概念の検討を行った。また、人物や事物に対する評価に関わる話題が多く見られる自然会話の基礎データベースを作成し、自然会話における構文の分布を観察することにより、構文の現れ方と談話場との関連を記述した。

研究成果の概要（英文）：This research aims at describing the property-predicating constructions of Japanese by focusing on cognitive processes, and clarifying the differences between constructions; copula construction, verb construction and Double-subject construction. In addition, by collecting data of natural conversation with topics related to the evaluation of people or things, it was observed the distribution of the property-predicating constructions and described the relationship between discourse and constructions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：属性叙述、属性認知、二重主語文、名詞述語文、所有構文、日本語、構文、自然会話

### 1. 研究開始当初の背景

事象叙述／属性叙述といった叙述の類型に関する議論は、佐久間(1941)、三上(1953)、益岡(1987, 2000)をはじめ、日本語研究の中で古くよりあるが、近年、それらを文構造の観点からより体系的に捉えようとする研

究が盛んになっている。現代日本語の属性叙述に関わる構文の中で、二重主語文（「彼は目が青い」など）や～ヲシテイル構文（「彼は青い目をしている」など）については従来から、多くの研究の蓄積がなされている。特に、Fillmore(1968)により提案された「譲

渡不可能所有物」の概念を応用し、日本語の記述における有効性を示す研究は多い(影山1990, 角田1991など)。また、二重主語文の成立条件に関しては、「XはYがZ」のうちXとYに“aboutness condition”が成立することが条件であるとするShibatani(1994)の研究や、「YがZ」全体が「X」に対して「情報度」が高いことが条件であるとする菊池(1990)の研究などがある。また、～ヲシテイル構文については、「Xは[[Z]+Y]をしている」のうち、YがXにとって「普通所有物/非普通所有物」であるとする角田(1991)や、「根源的属性」でなければならないとする佐藤(2003)の研究がある。このように、各構文内においては、より妥当な概念の検討を含め、記述の精度が増してきている。

しかし、同じく「目が青い」という属性を表す、二重主語文「彼は目が青い」と～ヲシテイル構文「彼は青い目をしている」では何が異なるのか、同様に、<性格が優しい>という属性を「彼は性格が優しい」「彼は優しい性格をしている」、さらに「彼は優しい性格だ」のように名詞述語文で表した場合とで何が異なるのかを記述する研究は本格的になされておらず、有効な概念も提案されていない。つまり、「目が青い」も「青い目をしている」も<目>について<青い>ことを述べるという点では差異がなく、“aboutness condition”や譲渡不可能所有物、普通所有物といった概念がどちらの説明にも当てはまってしまふからである。これらの「情報価値」を規定する概念や、「所有者と所有物の関係」を規定する概念はいずれも、構文を成立させる属性と成立させない属性とを区別するには有効であるが、同じ属性が複数の構文で成立する場合に、その構文の使い分けを記述するには十分ではないと言える。

このように、属性叙述において、構文間の差異や体系性を記述するための枠組みや概念は、まだ十分議論が尽くされている状態にはなかった。

## 2. 研究の目的

属性叙述に関わる複数の構文を体系的に記述するためには、何についてのどのような属性かといった「属性」そのものに注目するだけでなく、属性に関わる多様な側面、たとえば「獲得した情報からいかにして属性の認識にいたったか」、「属性に関する情報をどのように整理し記憶しているか」といった属性の認知過程にも注目し、記述の精度を上げることのできる新たな理論的枠組みが必要である。

そこで本研究は、人間が主体的に情報を選び取り属性を形成する心的過程に着目して記述を行い、複数の構文間の体系性を明らかにすることを目的とした。

より具体的には、考察対象とする構文を、「名詞述語文」、「形容詞述語文」、「二重主語文」、「～ヲシテイル構文」、「～ガスル構文」にしぼり、これらの構文相互の差異が記述できる理論的枠組みを提案することを目指した。つまり、ある属性がAという構文でもBという構文でも表すことができる場合に、その差異が何に基づくのか、そこに関わる認知的な概念を特定し、記述を行う。

## 3. 研究の方法

本研究では以下の2つの手法を取り入れた。

(1) 社会心理学領域における研究から、人間の属性認知に関する理論的枠組みを積極的に応用する。具体的には「獲得した情報からいかにして属性の認識にいたったか」、「属性に関する情報をどのように整理し記憶しているか」など、構文を体系的に記述するのに有効な概念を特定する。

(2) 構文の文内で見られる文法現象だけでなく、自然会話における構文の分布を観察することにより、属性認知の動的な過程を反映した構文記述の枠組み作りを目指す。

具体的には、人物評価に関する話題が多く見られる家庭内会話と社会人会話を収集し、属性叙述に特化した会話データベースを構築し、それを用いて構文の現れ方と談話場との関連を記述する。

## 4. 研究成果

(1) 名詞述語文と二重主語文の分布の比較として、文レベルで観察できる文法現象の記述を行った。従来、日本語は二重主語文が幅広く成立する言語として認められ、譲渡不可能性の高い概念であれば、ほぼ問題なく成立するとされてきた。しかし、今回行った作例調査・コーパス調査の結果では、人物の身体部位など<部分>に関する属性を表す場合には二重主語文が優勢で、かつ無標の構文であるが、人物の評価に直接関わる「性格」「顔立ち」などの<側面>を表す場合には、二重主語文よりも名詞述語文が優勢で無標の構文となることが明らかになった。

すなわち、従来の記述では、<部分>と<側面>は、いずれも譲渡不可能所有物として日本語では二重主語文を成立させるものと見なされてきたが、名詞述語文と比較した場合にその記述は十分ではなく、<部分>と<側面>では、譲渡不可能性の在り方が異なり、その概念の適用を見直す必要があることを示している。(図書[2]、学会発表[3])。

なお、このことは、どちらの場合も二重主語文が優勢である中国語と比較することで、より明確な日本語の特性として記述することができる(学会発表[2])。

(2) 動詞述語の構文分布については、日本語

の現象を中心に、文レベルで観察される属性叙述の特徴と、談話レベルに反映される特徴の統一的記述を行った。具体的には、味覚・聴覚・嗅覚を表す言語形式として、～ガスル構文（「甘い味がする」「きれいな音がする」など）と、～ヲシテイル構文（「甘い味をしている」「きれいな音をしている」など）の両構文を取り上げ、構文間の差異を明確にし、属性叙述に関わる言語現象にどのような概念が関与しているか、検証を行った。

その結果、以下のことを明らかにした。まず、～ガスル構文は「知覚」の認知過程を言語化することができるが、～ヲシテイル構文は「知覚」の認知過程を言語化することはできず、事象叙述に現れるのは、～ガスル構文のみである。一方、「知覚」により得られた情報を、環境の中の対象に付与するという「属性付与」の認知過程は、～ガスル構文によっても～ヲシテイル構文によっても言語化される。したがって、属性叙述には～ガスル構文と～ヲシテイル構文の両方が現れる。

ただし、属性叙述であっても、「知覚」の認知主体を顕在化させたり、環境に対する探索を活性化させたりする文脈の中では、～ヲシテイル構文は不適格になる。また、従来、一時的な属性は～ヲシテイル構文を成立させないとされてきたが、それは、属性の一時的・恒常性の問題ではなく、属性の探索活動の活性化の度合いによって説明されるべきであることも指摘した。

また逆に、属性叙述であっても、「属性付与」の認知主体を活性化させる文脈では、～ガスル構文が不適格となり、主に語用論的な制約・傾向に反映していることを述べた。

以上、事象叙述と属性叙述の関係を考えるうえで、味覚・嗅覚・聴覚という意味領域の持つ特殊性や、「知覚」の主体性と「属性付与」の主体性という2つの側面から属性叙述をとらえることの重要性を指摘した。(図書[1])。

(3) 属性叙述に関わる構文を動的な認知過程の中で観察するための自然会話データベースを作成した。会話データの内訳は、①大学生による対面会話（会話人数は2～4名）、②社会人による対面会話（会話人数は2～8名）、③家庭内会話（会話人数2～4名）であり、合計約70時間分の音声・映像による自然会話データを得た。

これらの自然会話データは、文字書き起こしと、属性叙述に関わる断片の抽出、および断片のカテゴリー化を行い、属性叙述に特化した自然会話データベースとして整理した。そのうえで、研究代表者の承認を得た利用者限りパスワードを配布する形で、WEB上で限定公開をしている。

(<http://www.u.tsukuba.ac.jp/~sawada.hiro>

[ko.gb/data.html](http://www.u.tsukuba.ac.jp/~sawada.hiro/ko.gb/data.html))

(4) 上記(3)で収集した自然会話データの観察を通じて、「語り (Narrative)」において「評価 (Evaluation)」と「終結部 (Coda)」がどのように形成され、それが属性叙述の言語形式とどのような相関を持っているのかについて記述を行った。

その結果、従来指摘されている聞き手行動として、大きく2類型（「相づち型」、「相互提示型」）あるほかに、さらに「評価共有型」の1類型を示した。「評価共有型」の語りにおいて、聞き手は、語り手の語るデキゴトに対して、その原因を推論してみせること、あるいは、その出来事や登場人物に対してステレオタイプを形成することが多く観察された。すなわち、聞き手は他者の語りに対して、「評価 (Evaluation)」や「終結部 (Coda)」に関わる発話を行う際に、自己の経験・知識を参照した原因帰属推論や、ステレオタイプ認知を行っており、それは、「相互提示型」と同様に、自己の経験や知識を開示する行為であることを指摘した。(学会発表[1])

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

[1] 澤田浩子、書評・紹介：泉子・K・メイナード『マルチジャンル談話論—間ジャンル性と意味の創造—』、日本言語学会『言語研究』、査読有、141号、2012、69-79.

[学会発表] (計3件)

[1] 澤田浩子、聞き手は「語り」の何を聞いているのか—「評価」「結末部」における聞き手の参与行動の分析から—、The 2nd International Symposium of the Department of Asian and African Studies, Faculty of Arts, 2012年3月14日、Ljubljana University (スロベニア共和国)

[2] 澤田浩子、"Double Subject Sentence in Japanese and Chinese", The 1st International Symposium of the Department of Asian and African Studies, Faculty of Arts, 2011年3月23日、Ljubljana University (スロベニア共和国)

[3] 澤田浩子、Attribution in Japanese Communication: The Interface between ethnomethodology and construction grammar, Lingvistični Krožek Filozofske Fakultete v Ljubljani, 2010年3月22日、Ljubljana University (スロベニア共和国)

[図書] (計2件)

[1] 澤田浩子、味覚・嗅覚・聴覚に関する事象と属性、影山太郎(編)『属性叙述の世界』

くろしお出版、査読無、2012、203-219.

[2] 澤田浩子、「彼は親切的な性格だ」と「彼は性格が親切だ」—中国語から日本語を考える—、砂川有里子・加納千恵子・一二三朋子・小野正樹(編著)『日本語教育研究への招待』くろしお出版、査読無、2010、251-271.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.u.tsukuba.ac.jp/~sawada.hiroko.gb/data.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

澤田浩子 (SAWADA HIROKO)

筑波大学・人文社会系・講師

研究者番号：70379022